

編集後記

かねてより、リハビリテーションとスポーツの関係に興味をもっていた筆者として、今回それが「特集」としてとりあげられ時宜にかなったものと考えている。

藤原氏は体育学の立場から障害者の社会復帰後を中心としたスポーツの利用の実態を総括し、また芳賀氏は身障者の足ともいえる車椅子のトレーニングについて、やはり同じ専門分野の立場から最近のデータを提示して下さった。一方、中嶋氏は長年にわたるスポーツ整形外科の経験から具体的な症例と治療方針をのべられ、medical と athletic の二面からスポーツ医学をとらえるべきことを解説して下さり、初山氏他は「スポーツ処方」の体系化の必要性を説かれた。

畑田氏は大分国際車椅子マラソンの開催の立役者のお一人として活躍され、その経験からリハビリとスポーツの今後の課題を呈示された。また、矢部氏は留学先よりヨーロッパ諸国での見聞録をお寄せ下さり、かの地ではスポーツがリハビリ医学のみならず、地域社会にとけこみ、さらには、しかるべき専門家のあり方など、我が国とのちがいとあわせて、ヨーロッパの方がはるかに先進国であることを感じさせられた。

ともかく、本特集によって、スポーツがも

っとリハビリ医療にとりいれられなければならないが、「スポーツ処方」の問題を含めてデータ不足もあり、また、制度上からもヨーロッパ諸国の域にはまだ及んでいないことが分かった。今後、この方面での研究がまたれるし、将来あらためて「特集」をくむ必要がある。

さて、「研究と報告」では野々垣氏による PMD の多数例についての ADL 推移は力作であり、大橋氏他の「症例報告」とあわせて、「総合リハ」への投稿は数のみでなく、内容の面でも年々向上していることは読者諸兄姉とよろこびたいものと思う。

連載の講座も力作ぞろいで、リハビリ医学の学問的位置づけも確立されつつあるが、かたや、萱場氏が巻頭言でのべられているように、リハビリ医療がもっと地域と密接する必要があることとあわせて、医療費抑制政策にどう対処すべきか、我が国のリハビリ医療は前途多難といえる。

ともかく、がんばりましょう。

本号がお手もとにとどくところは皆さま方の多くは学会の準備にお忙がしいことと存じます。どうぞ御自愛下さい。

(千野 直一)

次号予告(第11巻 第6号)

特集 脊髄損傷

高位脊損者の呼吸管理……………九州労災 吉村 理・他
脊損者の自律神経障害：起立性低血圧と
自律神経過緊張反射……………総合せき損センター 岩坪 暎二・他
脊損者における腹部外科の問題……………神奈川リハセンター 山本 敬雄・他
脊損者の体力……………産業医大 浅山 晃・他
座談会／脊損者の生涯にわたる健康管理
司会：緒方 甫／大川嗣雄・宮崎一興・畑田和男・今井銀四郎

巻頭言 研究と報告

日常生活動作と反応能力……………名大・第一内科 祖父江 逸 郎
頸髄損傷による上肢麻痺に対する機能再建：
上腕三頭筋の機能を中心に……………慶大・整形外科 伊藤 恵康・他
脳卒中患者の障害の構造の研究：第1報：片麻痺と
起居移動動作能力の回復過程の研究……………代々木病院 二 木 立
CT-6 腹部 CT 検査の進め方……………東大・放射線科 吉 川 宏 起
上肢の機能解剖(3)
リハ医に必要な知識としての上肢機能再建術
①中枢神経系(脳性麻痺、脳卒中)を中心に……………弘前大 福 田 道 隆
②末梢神経麻痺のサプリメント……………川崎医大 明 石 謙

一頁講座

スプリント(6) 末梢神経麻痺のスプリント……………川崎医大 明 石 謙

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水野 祥太郎
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江口 壽榮夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
加倉井 周一
賀 集 竹 子
河 邨 文 一郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
齊 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
橋 倉 一 裕
長谷川 恒雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)